

# 駿台史学会へのお礼の言葉

阪 東 宏

こんにちは。西洋史の阪東です。駿台史学の過去・現在・未来というようなことでは私、あまり言うことがないんです。一つだけ、幹事長というものを一期やったことがあるんですけど。私の記憶では駿台史学会っていうのは、おおいに私のために元気を提供してくれた学会でありまして、この学会のために私が粉骨砕身してっていう覚えはありません。ないであります。色々論文を載せていただくとかですね、そういう点で大変良かった。私が明治大学にきたのが1970年ですから、そんなに古いことではないんです。その前に『歴史評論』というものの編集をやってえらい苦勞したことがあります。その『歴史評論』の編集時にもう頭にくるようなことが色々起こるんですよ。著者との関係とか。今でも忘れられないのが宋の研究者で名古屋にいた方が、真っ赤になるくらい初校のゲラを赤くして、けろりとしている人がいたんです。これはもうどうしようもないなと思って。そのうちに雑誌に10ページで自分の言いたいことが書けないような人は歴史家の資格がない、と思い始めたんです。だけど、そうはいかない。やっぱり10ページで全部のことを書くっていうのは、ちょっと、歴史は何ていうか史料というのがありますので、10ページで自分の言いたいことを書けるものではなかったんですけど、その時は編集者として苦勞したもんですから、そういうふうにしたんです。でも、『駿台史学』はそんなことはありません。それで大変助かりました。私が幹事をやっていた時はまだ(年)2号でしたが、(年)3号出るようになりましてから、ますます編集者にとって余裕ができてきたと言えるんじゃないかと思います。もう一つ思い出すのは、日・東・西・考古・地理っていうふうに関係のある分野の人が一緒になっているというのは、やっぱりいいことです。さて私が明治に就職してからしばらくしてお目見え論文っていうのを書かなければいけない、と。で、「人民ポーランド農村の若い世代」っていう、同じタイトルの回想記集という10巻本が出ていたんですが、その3巻目か4巻目までの内容のうち、興味があると思われることを述べました。誰も読んでくれないんじゃないかと思ったんですけど、萩原龍夫先生という方がおられてね、読んだっていうんですよ。あれはなかなかおもしろい、と言ってくれました。萩原先生がそういうふうに言ってくださったので、大いに感激しました。私の話しはそんなことから、30分も使わないで20分で終わります。

私自身は歴史の勉強をポーランド史から始めたんです。だけど、ポーランドというくには西洋史のなかでも変な分野だったんです。まして歴史全体から見ると、あまり知られていない分野だったんです。初めのうちはポーランドのことだけやっていたんですが、段々経てくるとそうもいかなくなる。で、確か1995年に『ポーランド人と日露戦争』という本を書いた。そうするとね、ポーランド人と日露戦争ですから、ポーランドとロシアと日本。戦争が朝鮮と満州だったから、そのことも書かねばなりません。それでね、いろんな人にお伺いをたてた。日本史の人、東洋史の人。最後に神田先生に聞きましたら清側の史料はどこかに存在する、とおっしゃる。しかしとてもそこまで手がまわりません。その日露戦争の原因の一つになった東清鉄道という、ヴィッテという大蔵大臣が肝いりで始めたという、それがね、当時の記事なんかを集めた記録を見ますと、日本でもかなり注目されていたらしんです。シベリヤ鉄道というのは。これは大変なことをやっているなど。軍隊にいる人は勿論そうです。シベリヤ鉄道ができちゃうと、ヨーロッパ・ロシアからどんどん極東に兵隊や武器が運び込まれてしまう。戦争を始めたのは1904年確か2月でしたが、その時にはちょうどバイカル湖のところだけシベリヤ鉄道はできていないんですね。バイカル湖の周りは工事するのが難しいんです。戦争中の1904年の6月だか7月だかにやっとできたんです。田中義一という軍人が参謀本部第二部ロシア班長でして、部下に命令しましてね、シベリヤ鉄道で一体、一日何回列車が往復してどの位の兵員と物資を運べるか調べろ、と言った。そうしたらね、戦争が始まる時には一日8往復で25万以上の兵員と物資を運べるはずだ、という計算をしたんだそうです。その部下の軍人がね。田中義一は、そんなこと御前会議に出せない、日本はせいぜい20万人しか前線に出せないのにね、相手は25万人もいるのでは負けちゃうじゃないか、と。数を少なく報告しろ、と部下に命じるんです。一日6往復しかできない、と。そうすると20万足らずになるんだそうです。あ、日本史の山田先生に教わったんです。田中義一の伝記には2種類ある。2種類とも明治大学にある。その詳しいほうを見ると、そのいきさつが書いてある、と教わったものですから、読んだら、なるほど、と。それで1903年12月だかの御前会議で、シベリヤ鉄道は一日6回しか往復できなくて敵の兵力は20万以下である、ということを言って、明治天皇はそれを信じ、戦争に入ったんですって。このことを知って以来私は軍人のいうことはあてにならない、と信ずることにしました。アメリカの統合参謀本部議長とか何とかいったってみんな軍人ですから。ああいう人が言うことは、余程疑って聞かないとだまされちゃう。特に日本の軍人は人をだますことを当然のことだと思っている。そういう習慣があるから、それはやっぱり自衛隊も同じじゃないかな、と私は思っています。ところでポーランド人と日露戦争ということ調べる必要が生ずると、ポーランドだけでは済まない。ロシア史や満州のことも、またシベリヤのことも勉強しなきゃならない。よく言えば、視野が広まったことになるんじゃないかと。ヴィッテの大蔵省文書を本当に調べたロシアの研究者がいた。ロマノフっていう人なんで

すけど、その時にはまだソ連時代の 1928 年。その人がとことんヴィッテの文書を調べて、『ラシーヤ・ヴ・マンチュリー』っていう本を書いた。英訳もあります。日本語訳もあるんだけど、原書房から出た。読めば読む程分かんないような日本語で、ひどいものでした。その本、ロマノフの本が出たのが 1928 年で、その後スターリンが歴史学の問題についてとやかく口を出す直前でした。それがよかった。それからソ連史学は次第に悪くなります。日英同盟とか日露戦争についてソ連の歴史家が書くことは、それはもう国益優先で、国際主義の見方は消えてしまいます。ソ連文献もやっぱりペレストロイカが行なわれる前は、信用してはいけないのか、と今になると思います。

明治大学を定年退職してから自由の身になったものですから、ますますそういう気分になりまして、97 年から日本外交史料館に通いだした。門番の守衛のおじさんと仲良くなり、二度ほど海野先生とばったり出くわしました。海野先生は韓国のことを調べるために外交史料館に。私はユダヤ人に対して 1920 年代から 40 年代の日本はどんな政策をとったか、調べるためでした。ユダヤ人の問題は日本でも結構ジャーナリスティックには知られているもんですから、誰かはもうやっているだろう、と思って専門家に聞いたら、まだ誰もやってない、と。おまえ、やってみたらどうだ、というわけで。やりまして、2002 年春に未来社から出版されました。それを要約したものを古い大学時代の友達に英語に直してもらって、それをあの 'Holocaust and Genocide Studies' っていう雑誌に提出することにしました。私のまた虫のいい最後のお願いは、その日本語要約版を『駿台史学』に載せてくれないかな、と実は内心思っております。ちょうど時間になりました。(付記 この論文は 116 号に載せて貰いました。)